



みち 古道が紡ぐ物語



下ツ道から華やかな吉野の歌舞伎世界を訪ねる

平城京から南へほぼまっすぐ通る下ツ道、後世の中街道は、藤原京を過ぎ飛鳥あたりから南西に向きを変える。古代豪族「巨勢氏」の本拠地巨勢谷を通り紀の国へ至ることから「紀の道」、あるいは「巨勢道」ともよばれ、古代から重要な官道であった。平安期には高野山詣でが盛んになり、また、途中で吉野の金峯山や大峯に通じる下市街道が分かれる信仰の道であった。

吉野へ至る道は、吉野川で和歌山街道（伊勢南街道）に合流し、吉野山や大峯を訪れる人々でにぎわったが、大台山系に発するこの大河一帯は、神武東征や古代山岳信仰、天武天皇の壬申の乱、後醍醐天皇の南朝と、数々の歴史が秘められている。そして豊臣秀吉が、「一目千本」と愛でた「芳野の花見」から我が国随一の桜の名所としての名が高まった。山間地とはいえ、古くから都の文化が伝播し伝統の中に息づき、江戸期には浄瑠璃・歌舞伎の三大名作の一つ「義経千本桜」、そして「妹背山いもせやま 婦女庭訓おんなていきん」において、ともに哀しいながら華やかで色鮮やかな世界が展開される。

飛鳥川沿いに「紀の道」に行く

藤原京から中街道（下ツ道）をさらに南下すると、近鉄飛鳥駅の前から、飛鳥川の堤に沿って、南西に向かうこととなる。

この辺りは、近年話題を呼んだ「牽牛子塚古墳」や「マルコ山古墳」など、いくつもの古墳が眠る真弓丘陵、越智岡丘陵で、道はそれらを縫うように進み、高取町森でさらに西へ向きを変える。

小高い山に挟まれた田園地帯を、市尾箸墓古墳（高取町市尾）、御所市葛、古瀬へと進むが、この一帯は、古代の豪族巨勢氏の本拠地巨勢谷で、道は、さらに紀の国に向かうことから、「巨勢道」あるいは「紀の道」「高野街道」とも呼ばれる。

近鉄・JR 吉野口駅に至ると御所市古瀬で、「大坂」や、御所市の古い町並み「御所まち」からの道が合流し、少し南の同市奉膳では吉野の方面へと下市街道が分かれ、「右かうや（高野） 左大峯」と彫られた大きな道標が今も健在である。

ここから右の道は高野山、紀の国へ通じる山間の道である。御所市と五條市の境となる重阪峠を越えると広い高原部で、今は「テクノパーク・なら」（五條市住川町）として工業団地が開発され南大和の産業拠点となっている。

この辺りで、中街道は大和高田から南下する下街道（国道 24 号線）と合流する。

吉野川に出て吉野山、大峯に至る信仰の道

一方、奉膳から左の道は「下市街道（車坂越街道）」である。今は、国道 309 号線として整備され、車坂峠（大淀町）に至ると、吉野川や吉野山、そして天気の良い日は大峯が一望できる。

今から 1300 年前、役小角がこの地から吉野連山を望み、山上ヶ岳を開山の地と定めて大峯山に入峯したと云われている。

この道は、古代、飛鳥から吉野に入る最も平坦な道で、大勢の従者を連れた皇族・貴族には便利なことから最も古くに開けたといわれる。



近鉄飛鳥駅の前から中街道は南西に向きを変える。

数々の古墳が眠る真弓丘陵、越智岡丘陵に行く。



御所市奉膳に建つ「右かうや 左大峯」の道標。

後醍醐天皇を祀る吉野神宮（吉野山）。



吉野山上の遠望。

金峯神社奥の「義経隠れ塔」。



吉野川を挟んで仲良く並ぶ妹山（左）背山（右）。

峠を右に下り吉野川に至ると「和歌山街道」、現在の国道169号線で、江戸期に紀州藩の参勤交代の道として急速に整備された道である。この辺りまでが大淀町で、川を挟んだ対岸が、大峯の玄関口下市町である。

「義経千本桜」の華やかな歌舞伎の世界

古来、吉野は数多くの歴史舞台となり、さらに、山岳地帯の持つ神秘性は数々の伝説の元ともなってきた。その一つが、平清盛の嫡孫で美貌の貴公子として名高い平維盛の伝説である。

平維盛は一ノ谷の戦いの前後に密かに陣中から抜け出し、高野山にたどり着いて出家したという。その後、享年27歳で、入水自殺を遂げたとされるが、実は紀伊半島の山間部で生き延びたという伝説は、奈良県野迫川村、十津川村などに残り、山中には居所や墓所とされる地がある他、さらに三重県や静岡県にも墓所が伝わる。

二代目竹田出雲らによる浄瑠璃・歌舞伎の三大名作の一つ「義経千本桜」も、そのような伝説を

受けた一作で、三段目に登場する鮎屋の奉公人「弥助」が、実は平維盛であるという奇想天外な筋書きで、モチーフとなった創業800年の釣瓶寿司屋は今も下市の町に実在する。

この寿司屋の息子が、関西で悪戯小僧をいう「ごんた」の語源となった荒くれ者「いがみの権太」で、維盛を守るため妻子を犠牲にした上、自らも誤解により父親に命を奪われるという筋書きで、下市町内にはなぜか墓所まである。そして、四段目で源義経の吉野山潜伏の物語へと続いていく。

史実としての義経の足取りは、佐藤忠信、武蔵坊弁慶、静らを伴い吉野山の吉水院に数日間逗留し、時の法院に手厚く遇された。しかし、兄頼朝の追及の手が伸びたことを知り、さらに奥地の金峯神社あたりに隠れることとなった。

金峯神社奥には「義経隠れ塔」といわれる小塔があるが、追手に急襲された時に屋根を蹴破って逃げたとされ「蹴抜けの塔」の異名も持つ。

付近には、佐藤忠信が防戦に奮闘した「花矢倉」や、追手の豪傑横川覚範の墓などがあり、史実と浄瑠璃、歌舞伎の世界が交錯する。

「妹山」「背山」の歌舞伎の世界

また、吉野町上市には、吉野川を挟んで、こもりとした小山の「妹山」と「背山」があるが、ここを舞台とした、「妹背山いもせやまおんなていきん婦女庭訓」も浄瑠璃、歌舞伎の名作である。

吉野川を隔てて妹山と背山に住む久我之助こがのすけと雛ひな鳥は、お互いの家同士が領地争いで不和であるものの密かに恋仲となっていた。つまり、ロミオとジュリエットのような話であるが、そこに、天智帝と帝位篡奪を図る悪人蘇我入鹿が絡み、男女は命を落とすという、歌舞伎らしくこれも奇想天外な話が花盛りの吉野を舞台に展開される。

両作とも物語の哀しさにもかかわらず、桜が咲き乱れる華やかな舞台しづらの設えである。確かに、吉野は都人の文化が息づき、桜も日本随一と名高い。そこに人々が抱くあこがれの証が、両作にあるように思えてならない。（山城 満）